

友野清文著

『ジグソー法を考える』
―協同・共感・責任への学び―

飯牟禮 光 里

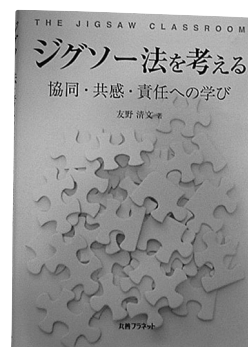
友野清文氏にはじめてお会いしたのは二〇一一年の春であった。教職課程の科目履修で担当教員だった。当時、昭和女子大の学生であった自分が教壇に立つために勉強面から心構えまで全てにおいて熱心にサポートをしていただいた。

大学卒業後、中高の教員として教壇に立った私に Elliot Aronson, Shelley Patnoe 共著『*Cooperation in the Classroom: The Jigsaw Method*』

(二〇一一年)の翻訳をしてみないかというお誘いをくんだり、私がジグソー法と出会ったことになった。友野氏は以前からアロンソン著の本をいくつも手に取っており、教授法の一つとして大いに有効活用できると研究を続けてこられた。

お誘いいただいた翻訳はエリオット・アロンソン、シェリー・パトノー共著 昭和女子大学教育研究会訳『ジグソー法ってなに?―みんなが協同する授業―』(丸善プラネット 二〇一六年)として出版された。

さらに、これまでのジグソー法に関する賛否両



2016年11月30日発行
丸善プラネット
A5判 148頁
定価 本体1400円+税

論を含め、現代の教育現場でどのように実践し、生徒が何を求めているのか、教員側が生徒に何を与えることができるのかをまとめたものが本書である。

本書の全体の構成は以下のようになっている。

- 1章 ジグソー法の背景と思想
―学校文化の変容のために―
- 2章 ジグソー法が目指すもの
―アロンソンらの「初期論文」から―
- 3章 ジグソー法の修正版について
- 4章 Cooperative learning と Collaborative Learning
- 5章 学生参加型授業への挑戦
- 6章 教職科目におけるジグソー法の実践と課題

1章から4章にはジグソー法の誕生にまつわる話やアロンソンが研究し目指してきたものが端的に記されている。5章と6章では大学での授業におけるジグソー法実践が記されており、今後の課題や友野氏の考察がまとめられている。

はじめにジグソー法とは何かを簡単に説明しておきたい。ジグソー法はグループ学習である。

「ジグソーグループ(ホームグループ)」と「エキスパートグループ」という二種類のグループを作る。皆が同じ資料を読むのではなく、各々のメンバーが異なる部分を読み、それをグループで統合することで各自の学習を進めていくものである。

ジグソー法のキーワードの一つとして「技能としての協同」(cooperation as a skill)とあるように学習の戦術(strategy)として協力を教えるということが「ジグソー法」の目的である。自分が学ぶために否応なく協力していくことが求められるのである。

少し話はそれるのだが、ジグソー法と聞いて日本では「知識構成型ジグソー法」を想像する人も少なくない。知識構成型ジグソー法は従来のジグソー法で強調されてきたグループ活動の活性化やコミュニケーション力の養成ではなく、一人ひとりの理解深化に有効だと考え、ジグソー法の「仕組み」を活用し、「知識構成」「理解深化」に特化させたものである。また、ジグソー法の評価も肯定的なものだけでなく、責任感を持って作業を進める中で他者との競争性が生まれるのだが、その結果として友だちと対立関係が生じてしまい、クラス内の雰囲気が悪化する状況に陥る場合があ

る。競争性を育むことは教育の一環として決して悪いことではないのだが、敗者になってしまった生徒へのフォローはともデリケートな問題であり、いわゆる「おちこぼれ」をなくすためにはっきりと白黒つけることを否定され、非難されるのであるから、現場の教員は心身ともに疲れてしまおうだろう。

現実として、ジグソー法本来の目的である「他者と協力しながら作業をする」ということは非常に難しいことなのである。本書でも大学の授業における実践と課題を挙げているが、他者とコミュニケーションを図りながら課題に取り組むことで、他者の意見から自分が気づくことができなかつた情報を得ることができると、一方で、客観的な意見を得られる前に作業が円滑に進まないケースがあるのだ。

問題の一つは現代の子どもたちのコミュニケーション能力の低下である。対象学年が低い場合は課題の難易度を下げる方法があるが、下げるだけでは解決にはつながらない。具体的に言葉で表現することに抵抗を感じる子どもも多く、特に物静かで内向的な性格の子どもは言葉を無理やり発するだけでストレスを感じる。ジグソー法は協力する大切さを教えるのが目的であり、子どもたちにとってこの教授法がトラウマになっては本末転倒

である。

以下のことは私自身の考えになってしまっているが、このような状況を改善するためにジグソー法を実践する上で二種類のグループを作る際に、グループのメンバー編成は生徒個々の性格を考慮し、リーダーシップをとれる子がグループ内に一人いることが望ましい。自分のやるべきことがわかり、即座に行動する積極性がある生徒がグループ内に存在すれば、同じグループの生徒の手下になる。また、自身のことだけでなく他者にも何をすればよいのか指示を出してあげる世話役のような役割を果たすことができれば更によい。教員から指示されるのではなく、グループ内の同年代同士で刺激し合う方が成長につながると期待できるからだ。しかし、小学校から高校までは生徒個々の性格を理解できる教員が何人もいるが、大学では日々接する時間や授業数などから学生の特性を把握するのが難しい。

本書ではこの教授法の正当性を訴えているのではなく、タイトルにもあるように「ジグソー法を考える」という視点から、今後の教育現場の中で有効的に活用していくことも丁寧に記されている。現場の教員として特に惹かれるのはジグソー法の研究や紹介等をまとめただけでなく、授業での実践がレジュメから反省・課題まで細かく記載され

ていることである。「ジグソー法」の提唱だけでなく、取り入れたことによる課題や授業での試行錯誤が我々読み手の知りたい情報を漏れなく伝えてくれている。また、実践したことによる葛藤や疑問点を素直に表現しているのも読んでいて親近感を抱くのである。

最後に、誰にでもあてはまる「正しい教授法」というものがあるのかと私は問い続けている。これまで提唱されてきた様々な教授法は時代に合わせて改革されてきた。受け継がれる一方で、新しい観点から研究・発表されてきたものも含めると数えきれない。ただ一つ言えることは、全く同じ子どもは誰一人として存在しない。そんな中で特定の教授法をあてはめていくのは、子どもの成長や個性を伸ばす上で障害になる場合がある。個々が集団社会で生きていくために、ジグソー法を活用し、他者と協力しながら学ぶ大切さを覚え、その傍らで個性を伸ばし、毎日が楽しく生活できる未来を開いてほしい。そして、ジグソー法が個人に見合った方法で用いられ、日々学ぶきっかけにながればよいと本書を読んで改めて考えさせられた。教師として、母としてそう思う。

(いいわれ みつり 淑徳SC中等部・高等部)